

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫防除技術情報（第 8 号）の送付について

このことについて、次のとおりお知らせしますので、御参照の上、防除指導方よろしく
お願いします。

記

1 情報の内容

麦類赤かび病の適期防除について

2 発生要因の現状

- (1) 気温が高く推移しており、農林水産研究所による裸麦の出穂予測では、11/20 播種で 3/15 出穂とされ、平年(3/21)に比べ 6 日早く、出穂・開花時期が平年に比べ、早くなると予想されている(表 1)。
- (2) 裸麦の開花期は出穂 5～7 日後で、この時期が防除時期にあたり、春先の天候は変化が大きく、開花期以降も、気温が高く降雨が多いと二次感染が助長されるので注意する。
- (3) 1 か月予報(3/5 高松气象台発表、3/7～4/6)では、気温は平年並か高く、麦類の生育が早まるものとみられ、防除時期に注意する。一方、降水量は少ない見込みとされているが、今後の週間予報等を確認する。

表 1 ハルヒメボシの出穂・開花期予測

播種日	出穂期	開花期 (気温が平年並～高温に推移した場合)
11/1	3/3	3/8～3/10
11/10	3/9	3/14～3/16
11/20	3/15	3/20～3/22
12/1	3/20	3/25～3/27
12/10	3/24	3/29～3/31
平年値 (11/20)	3/21	

- ・出穂期予測システムでの計算(予測地は松山)
- ・平年値(令和 3～令和 7 年作況試験平均)

3 防除上の注意

- (1) 本病が最も感染(第一次感染)しやすい時期は、裸麦、小麦ともに開花期～開花 10 日頃である。この時期に子のう胞子の飛散量が増加し、降雨と温暖条件が連続すると感染・発病が増加する。

(子のう胞子飛散状況は病害虫防除所ホームページの「調査データ」に 3/16 より掲載します)

- (2) 赤かび病の防除は適期を逃がさず実施することが重要であり、防除適期に降雨が多い場合でも、短い晴れ間を利用して確実に防除を行う。裸麦、小麦の防除適期は開花期であり、その後、気温が高く降雨が続くようであれば 1 回目の防除から 7～10 日後

に追加防除を実施する。

- (3) 防除薬剤は、トップジンM剤、ワークアップ剤、シルバキュアフロアブル等を使用する。これら薬剤は、カビ毒(DON等)の含有濃度を低減する効果が高いとされている。
- (4) 薬剤散布に当たっては使用基準を遵守し、周辺作物に飛散しないよう注意する。なお、トップジンM粉剤 DL、同水和剤は、麦類（小麦を除く）では出穂期以降1回以内、小麦で出穂期以降2回以内の使用となっているので使用回数に注意する（スミトップ粉剤は総回数1回）。

表2 大麦赤かび病防除薬剤

薬剤名	濃度（使用量）	使用時期	使用回数
トップジンM粉剤DL	4 kg/10 a	収穫14日前まで	出穂期以降は1回以内
トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	出穂期以降は1回以内
トップジンMゾル	1,500倍	収穫14日前まで	出穂期以降は1回以内
ワークアップ粉剤DL	3 kg/10 a	収穫7日前まで	3回以内
ワークアップフロアブル	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内
シルバキュアフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内
ミラビスフロアブル	1,500～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内

－ 赤かび病の発生傾向－

- (1) 愛媛県では、過去の多発年の気象経過から、開花期以降の日平均気温が17℃以上で降雨を伴う日が連続すると発病が増加し、さらに乳熟期以降も高温多雨条件の年に多発している。
- (2) 赤かび病の発生と出穂期前後の気象は重要な関係があり、多発年の年はムギの出穂期以降の平均気温が18～20℃を越え、湿度も80%以上が3日以上続く場合、あるいは降雨又は濃霧頻度が高い（日照時間が少ない）場合である。
- (3) 本病の第一次発生源である子う殻形成が盛んになるのは、日平均気温で13℃以上、降雨のあった直後であり、子う胞子の飛散が盛んになるのは、日最高気温で15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後である。子う殻形成と子う胞子飛散とはおおむね同傾向を示す。

※発生予察事業の調査実施基準（農林水産省植物防疫課）等より作成